巻頭随想　いま、伝えたいこと

洋画家の描く『古事記』の神話・伝説

京都産業大学名誉教授　所　功

今から千三百年余り前（七一二年）に撰上された『古事記』は、口誦の神話・伝説を見事に纏めている。しかし、そのイメージを絵像に描くことは、容易にできない。

しかも、敗戦後の学界・教育界では、戦前の反動で「記紀」への不信・否定が強くなった。それにもかかわらず、神話の神々や伝説の英雄などを描き続けてきた画家がいる。

それは、今年満八十歳の小灘一紀（こなだかずのり）氏である。鳥取で生まれて間もなく父上の戦死により苦労したが、叔父の導きもあって十五歳で画家を志した。金沢美工大卒業後、二紀展や日展などに続々入選している。

ただ、還暦ころまでは、彫刻的な自画像・静物画・人物画・風景画の油絵が中心であった。その間に、西洋（特にスペイン）の作品には「強い宗教心が潜んでいて……目に見えないものを表現している」ことに心打たれたという。

その一方で「科学の発展により死生観を失い……古より培われてきた日本人本来の魂が薄れ、経済至上主義を謳歌する現代社会にも心が痛んだ」小灘氏は、二十年前（平成十六年）ころから「『古事記』を中心とした作品」に取りかかったのである。

それは、長らく画壇で評価されなかったが、ひたすら描き続けたのが、「わだつみのいろこの宮」「ヤマタノオロチ」「イザナギとイザナミの国生み」「斎庭の稲穂（天孫降臨）」「五穀を生み出す大気津比売命（おおげつひめのみこと）」「三貴子の誕生」「産霊（むすび）」「五柱の別天つ神」「悲しみの下照比売命（したてるひめのみこと）」「伊須気余理比売（いすけよりひめ）」「天降る宗像三女神（むなかた）」「草薙剣（くさなぎのつるぎ）を授かる須佐之男命（すさのおのみこと）」および「荒海を鎮（しず）める弟橘比売命（おとたちばなひめのみこと）」「白鳥に生まれ変わる倭建命（やまとたけるのみこと）」「仁徳天皇のかまどの煙」「石之日売命（いわのひめのみこと）」などである（令和二年刊『神々の微笑（ほほえみ）』所収）。

これらの一連の作品は、次第に好評を博し、ついに令和五年春、「日本芸術院賞」受賞の栄に輝いた。その秋の日展に出品された「やまとは国のまほろば」を私も拝観して、深い感銘を覚えた。この作品には、勇壮な英雄ではなく、東征からの帰途に伊吹山の戦いで敗れ、身も心もボロボロになってヤマトへの路をさまよう悲劇の皇子が、リアルに描き出されている。

ちなみに、今年六月二十七日から十月十五日まで、伊東市の池田20世紀美術館で小灘画伯の大特別展が催される。